三和叢句集

229
46

夫天地も風雅之萬象なれハ
風雅を好きて風雅をよし、佛祖の行
従ふ人縁の言葉も書置給ひ
こゝに三輪亭現生阿師とかや
葉の句に入て俳諧の風情を探り
言葉を磨きてかの行持をも探悟

帝國圖書館藏

して古人の糟粕をなめんより
りと拵をおきて名のみを被る巧作
を拵ら学蛙の句のおもひ一大理あるへ
うら侘しと一年中の世帯するゆゑに
句をなし作りて急の我にて篇に
無し朝鄙の信友に語りたまふ
芭蕉のおしへには俳諧は畢竟己が為にし
実句にして信あり実あり情の河
くして句情ありけりさやうの好に
而して今無理題南てハ文を略
をは之河生句の我作の芽のなく
も有る好し句集せんと偽りあめに

おさなくて十四まで都に在
人と国々をさらぬ人は識をも
はなれける道にさへ人々にましまさず
のし国々の寺々をたづねて
まゐらせ所を尋ねて三十三国総志
年をへて和歌に河四国を歩み合掌に

仏菩薩をやしなひ拝みたてまつらんと
はなしく三人和歌をよみて御身を
河をこえ遠く記録にもせ世界を悟りて
身は井の中の蛙のごとく海を知らざる
をしらぬ人の憶をはかりてはなはだ
あやしき仏師の其身をまかせ難き

おもひよらぬ暦の月ごとに
年老の春とはしらずして

明和二乙酉
初春月

半鹿蔵子坊

石生

春之部

元朝やみどりの空の雲の行
元日や霞に梅の見ゆる海
元日やふくの神はいつまでも
元日や鶯の初音はつ春
元日に嬉し百八西にし
四海浪静かなる初日かな
年の寒越のうき白き出に
一服の時より今年に
鶏の聲に夜にあけし此の初

てうちらしく咲のまゝる
めくさき耳に入りて初鳥
初夢や水をも呈し梅の宿
蓬莱を雀の硯に日和かな
鶴の羽をつかし厨升めやゆゑの臭
蓬莱の旅かゝ曲る烏帽子かな
衣食住我が叶ハ宝こそ船
春ゆきやうてのかしらぞ二三日
咲つるや結ぶ綾る楝の椿
名残りに蓬莱に門張いしき春なりけり

揃きさ八重のし立ちけり霊川
海原の霞に廣し國の春
きる隣結びつきぬ彩や夷大國
みつうかしく筑に恵顔や笑幅子
若菜摘野にまたは霞の雜
飾り日の初まで咲うるで戎撰
出入の船の首や春る往月
春結月飛べ下咲き陰ゆかし
まるの月知れしその契り國の人
水に入て水の味走る海苔の蜷

海苔干しや浦の興味に一人歩
寒年も打つのりや海苔の味
古来なる川面の名和よ網の氷
猪の熊は中寒く来る寺の外
藪入や渡の前は往来の外
袖垣に結目揃しや菩の薹
白雪の芽は立あり隅田川
芹摘の向ふハ春しまたるの里
涼雲や多重の手ハ稍春のころ
河ちる雲や秋に住すの象東

白浪かゝ解て氷のはらゝ春し
梅の香や竹の格子に破れ窓
白の照妙ハ自由や梅の花
跡ふきぬ梅の薫りや庵の実
探つみをたて枕ひらくとき梅の宿
梅の匂ひ人ハ心疎ミる春
玄関に揃ふ厳あり梅の香
梅咲や昔に枝ぶり多くの枝
うぐひすの香は別てへだたり羅籬
一枝けふ散り梅の蕊開く

寒よ寐ざるとおもひけ梅の花
ちよと出ぬ梅よ見かへり梅の舞
梅さくや白陰の水もかゝり見え
捨られずまことに見えぬ梅の花
紅顔の茶やもよ屏に梅の花
ちからハつよし言葉の梅が匂ひかな
無造作の発句中よしうめの花
宇児の衣や隣ハ梅が娘達
梅くの香や川を要ニ牛の鼻
うめ折も牛の夢見て賊哉

南園のうちハ鉢座の梅ながら
名をもとめきくよ甘名の梅の花
いろくしの物に有梅も匂ひの風
楳のはなよ遠なし寒の埴の中
我ニ此の家をくれ薫るや臥龍梅
ふりあかす谷音にほるや梅の花
手向さや歌よ咲ける梅の花
青柳や人なしのよりあ式
青柳の下行水も柳ハの影
ゆれるゝのかも咲ては宗名柳ハ

枝ぶりのなびきかゝての糸柳ハ
咲ぬ日も生まれての柳の糸
玉のこゑよゝ見あかり糸柳
鶯の声　梅の木にや出嫌し
黄鳥のかけ迷蝶　なるや林
さゝ藪や　初音を聞も酒の味
梅なし　梅の枝見し　おほろ月
思ひ合ふかほ　百日や千年祭
三の朝團十郎　のかほ見この香
大絞よ　鶴の羽をのせ　春霞

大空よ花ましのゆるを霞かな
初霞のゝの数ふゆこのかほ
雑も見えぬあたりよ住めよ初霞
鏡面の春や弁財天の霞かな
猫の恋待るを頭上ふ　水鏡
竹を嗅ぐ虎毛の猫の悪（ワ）るさかな
萬代のうたを出るやこのはし弓
節分や竹八丈　木八木を峯
芥横わゝ寒と　蕨し　泉かな
三士順の手ほおもてのうらは横かな

此二つをはなれて廣し春の季
春草やひかりありて一つまみ
蒲公英や土筆よりつくし布袋
艸虎杖砂糖のなまを淡く
蝶々や燕かけこの八ゆかし
飛小蝶大要をかり――うち出て
行違て嬉しきなる小蝶は
もえ出にほんめりとなる水への水
永稲やこの世の中なる春の日
春なしの遊びを長き遅き春雨

春の日庭の山桜に志めり合
ひなめかしきやりよめてや春の日
年寿の装束光るこの水の
悲願の跡しきて雛のかれ
二親の玉露らしわて雛の絵
功あらはれて夕立母の雛
出代の香花菖蒲やモヽシカア
短冊を入れて八出の花川桜
眼よのけふ雨は夕のきらくさし
さらしこの花又さきさらしのなし

花に係ふ葉　実ざ桜ゝの外
散る桜ちらぬハ徳の法まで
中のよき夫婦　結ぶる桜ハ
衣桜や　ちるハ八日の出まつる
色ゝ糸山桜何の酒の友
酒ちやしふちやしと　夕桜
黄桜植て地に置き根の兄
物きら数根の地に置き
きらりし霞に日を吸　桜ハ
桜もあり　我も何かゝの香の子等

秋にて　ちる咲あり　山桜
吸筒に醍醐の味や　花桜山
花の山ちらさぬ橋葬其ゝの家
其の咲ず涙ゝの名残の面
謡に近き　ちるも花あれ　観ん
此面白にも見よ江戸をも
我ぬもいやも有ぬのもいやな花の房
強る心ての　いてあれ　是れの花
傘に　さくら結ぶ江戸の色
命ふせも　花も桜にて　花に結山

菜には雲には廿八番かし 隅田川
見渡しのよきの如 男は菜の山
帯しつ見え夜ら見ゆるも色
富士に何と桐油の下ら如花の旅
散さの花桜咲この色桜この枝
営は暮しのまう涙桃のまみ
鶯のなる二千年やまりのも
自国を観む民栄ゆや桃の花
悦ぶ京露のつらふや松の色
さ従この又元八幡の松のちれ

和らこの上帆のふるさまか松の色
茂林なるのきん玉のなきまつは花
雲の山雉飛ぶなきむ水のおとと
面よする雉の声も嬉しさた
野も山もとも遊び涼みや春の新
つまなるやいとこの中をゆく
乙鳥や子まき散なゆくの里
やさらけし一つ 春は葉の桃
何のさはうの後ての響の飛び行
鶯鳴きまま巳嬉しき 書雀くし

野も山も己か世に廣し蒔雲雀
世の人は踏ぬ芝にも雲雀の巣
ちよ／＼と我名呼なり親雀
一粒の米さへ見つる雀の子
芝に摺み抱をあはせて飛燕し
ゆつたりと空の通ふや春の水
草臥て枝よこたふや藤の花
春の行先見えもし西は海
一夜さまふしや緒りて海る宿
破垣に魚すよ面のつきや雉子の聲

月よ岸ちらにきえて凧あらん
此界の足蹄伸出日永このあと
雷も驚く時かおとし角
蝶の身も毛虫なりけよ遊びなり
陽炎や雲の達磨の猫脊よ畳
和らかに踏かためなり春の芝
いつの念い女はためなり宇治の奥
ゆつたりと柳よう舞る春の燈
一もと植にけりさとえまふ二

夏之部

欠伸しゝ時よ達磨も郭公
鶯をおも入咲てなくき々
有かゝなのゝときけよ時鳥
未と帰るゝ咲きやまし蜀魂
古里の便なゝ絶し杜宇
葉深ゝるよ時鳥咲けり
添うもや鐘雲の系は不如帰
山を越三程の田やほとゝきす
やゝ遊嬉し酒と肴よほとゝきす

天なかきの機ゝ衣も咲郭公
子鳥と八源左之引や杜鵑
主り綿の毒は止と紀不如帰
この里船留上る冒やかきゝを
波めゝア咲け今帰蓼八時鳥
今よゆる日本堤やほとゝきす
めくりい不来の雲や不如帰
蜀魂咲心つ志やりとおなせ枝
杜宇雲大様の盃程なえ人
時鳥咲ゝ心もかけ深る川

時鳥帰律殿へ投合衛門の
出てし遣ふ四方ちてのし時鳥
帰祐子のかきわる里や子規
椒河つき母の位立や杯への之
うつらし江一重八ぬ常よ文衣
住要居所もよき菜への花
搭燈立羽や嬉し参詣生皆
名こ乃とや酒ゝ者よ誕生会
山合錦や里の孫童ハ笑も似に
蓑虫め知る我垣根之む和の木

和のむや己々の垣根よ己ての露
清水ゝ切りまよ見ゝあり柚のむ
菖蒲ゝいふ名借てや団扇し
帰浮子や岑夏に折主に
以ゝうゝ承捨る柚をし夜の字
夜ゝきや夕凉んさ水の色
夜の卅や語きまこ乃所まて
蝙蝠や散よ音つ夏柳
校柱や古居のうしろ下居の安
蕈のりや萩枝の嶺の落住す

楽しや皷のまゝ結ひくらふ
皷打ちれせ浪花の夜吉原扇
花咲や浮世の花の夜すゞの雨
花てへ咲けりさゝなるけり夜涼雨
夜はまこ月に雲たり一合一ツ
水鶏よ笠の露見て田植この子
見このう八孤なくぬ田植こうぬい
早乙女や他人ゆ影む笠の紐
五月雨見する計の峰この丸
さゝされや志めつかふかき江戸の酒

二ツ夜の虎が縁や菖蒲草
花菖蒲せりきしアワ、
ほんしとあふかさりか柏餅
天地のうよれ中りはゝ入梅ひて星
いりれせぬまゆよ羽蟻の身縁ひ
力なくしく拂ひ見ぬや足元の蜷
伸る事ゝ蝸なるま捨蝸牛
蝉ゆ雄らの鶏の水やふや乍年
牡丹花の古根よかゝる涙この春
其内なるものいろは世牡丹ゞ

根分して藤つゝく庭の牡丹哉
このごろハ牡丹も照らの廿日月
其古根是一輪の牡丹かな
谷牡丹咲や御寺の奥深し
うるさきも牡丹よりふ白と塵
むかし見よ盛なり深見草
鑓為て嫁も古根を覚来ることの
こゝ古根今をさかりの世を牡丹
元服や肩上ケおろ々麻綱縁
むかしかり上て柳よ浴衣哉

汗拭て仁王立なり夏木立
動なき扇の陰もなし夏木立
明花を降とゞめぬ名所夏木立
夏木立天狗も出よ酒汲む
汲筒の脇流しや道夜往川
下駄はいて流を歩行夜の月
水底もまた濁ありなしの月
十八丁来てあれ夫程夏の月
名も知ぬ草も育や夜の月
吹く出て仰ぐ帯ハ涼し夜の月

木下暑雑也居ることの指也
傘を貸て見舞ハ人あり木下暑
行る作をあつめの山なこそ暑の句
暑き日やこのうつ傘の付推の本
車井の音中せはしき暑の句
初蝉は蕣ちりしとはつきし
淀の眼よ浪吉仕る暑この句
秋風の味を知見ゆ土用中
年寄を羨し情て此婦人
酒の香法醒る水無月汗と共

酒香をのむ部と涼し夜の香
涼しさよてゝし本堂は清水
出水の行ときいり松涼し
沖の帆の見えて涼しき鶴の声
橋にその其名涼し岩橋の友
出こしさ哉我のはして数形船
日々しみ勤て上の出てのみに
出水けんの涼しき夕への気
きん玉のちつこまるを涼この句
涼しさや西を向ふてよおつもるき

姉しの庵こそよされ先さとの
芽さきの寓士よりこゝろ菊子
若菜さくよりおもしろや初菊子
卯の花や蜆まつ嬉し夕月夜
ふる若葉よあれ今こそ若菜め茶の蕊
百姓のこゝろにかなふよりしの花
鬼にも挿るを軒の菖蒲や菜玉
皆さえも立のきなるへ菜玉
虫にくつやとめぬ網や紅の花
蘚やうき孝ちるよ帰蛙

床しさや庵法二階の軒向
男この柾太のなまなる門さみ
ぬれ蓑のしるも葉とぬるや蝶の影
何る夕に帰るへおもり蝶の心
赤水や己このちえの花つると
卯の花結門耳きなり是あれこ
学問や浮き世の根の原
我もぬよ凉しさよいのちのつまき
一雛け結の見えなり蜆る
祇園会や我も白狗尾葉

味ひを庵よりみんとする芭蕉庵
芭蕉葉六つの中は黄ばみ
名もしらぬ草も育つや夜の草
古年の木は葉つまむや旅寝する
夕立や一声このまゝ丸はだし
玉の汗吹く様の夏神楽
去年まゝより濁の中に蓮の花
宮ゝ面の障子来る毎月に
唇のうるほひもなし水無月に
毎月毎日せんかたつきぬ和への声

秋之部

名鏡や光明よつゝくる里の庵
浅き鳥や昨日は夕今の露
一ぱい世の露やまゝするにし舟
番解て雲の晴めや星の宮
橋も船も流して星の契かな
蓬布は紅くる紐も後は人たてり
虫の音は里よ楽ふや草の帝
帯しとゆるすもなし　泥衆
やましの人の枕かりやる　数修条

涅槃のしる知らぬ其の佛ハ魂祭
ませ垣や中ハ花の玉まつり
うら盆や五百羅漢の末佛
角水なき茄の麻殻や加舞ハ白
字らる盆や坂の径尓やらし灯
盂蘭盆やをとる拍子の蓮取
うら盆やなかりきくて月岸
東寺よ一村揃ふうら盆會
大勢のひとつなかりに盆踊
眼の出に付よる揺えや盆をどり

枕して虫の色や露のしらら
虫の音よ秋の浜はとうのひぬ
行燈の消さ雲て虫は之恐
香虫啼や団ハ苦たつてう
虫は菊の上んと人来り茶の庵
無人か来るなくまりつまわし
燭打や茶の力を持たてのう
八朔や母の痴ゆの白小袖
八朔よ左りうちハの桜かれ
物為や跟よ出かまさ付る

初雁やまき坂の静もきこえぬなり
落付し聲ハ古参の雁ならむとも
雁の静ク御山や出紀宮かな
田に雁や落付聲ハ一羽見えん
大空や静か計して聲の雁
去年の秋を探り見る雁の文
唐の流れもなし秋の此世
素麺の行義よろしく秋の風
吹き風や安心聲の経南無
秋風やこぼれて汗をよみの下

南蛮煙よ涙も珠数の玉あつかひん
丹なりきれて廣し秋の風
むくと起きよ御の笑顔に松露か
一ツ二ツ拾ひ満つる木の實この秋
地よ落し椎の実拾ふて一ツ
松の枝よかしこき落葉のかな
懐(フトコロ)へ菌の要姫ぬるむ宝珠
己の名を味ひよ消南無の秋
始まりに参れまでの文ふく
稲の気ぬこの蔓は道かな里

鬼灯や牡丹の井戸より上手
鶏頭は耳垂切らるゝ不審
まん猿がこゝのよハ知られぬ薗山
ゐつ出ませし薗をふた芝土の火に
初茸や中ゝ知られぬ生ところ
茸狩やさしつる人の手元に
枝豆やひく飛こむ所もなし　紀
常住中の鹿も所之木賊苅
猪をさ狩させて蘇の茎ゝの糸

ゆふ風散て芦咲よりも萩の花
生駒の山に鹿きこえる秋の萩
池に露も出渡りさぬ蘇の重りに
果てぬ雨に稲刈とめむ野辺に蘇
分かれ行ハ重きりの萩の露
燈の行ゝ色の陣より稲に渡しに
稲妻や稲の渡り行向　まだ待
落葉ししきよとまる玉の露
耶よ見えぬ虫の彼岸の艶の花
飛て来て艶ハ見えぬ露の玉

眼に見えぬ姿ありし秋の蝶
秋の蝶菊より外に移りけり
悦虫もかなりし也きを放生会
生きてハ眼や放生会
盃の中へ出ルや三日月
酒過ぎてハ橋かけのしふの月
名月や虫に見まさる後の色
影法の鳥帰までて月見ハ
月の出る桜の肩に何とハありけり
底に植法蔭ともふの月

不自由なき自由に月法圓出て
月見への影法までもとの影法師
むら雲なき切破までも月の光
恰の汐に味ありてふ法月
是ある妙一天四海月にしつ
法科に何をたのしまんけふの月
波にある水の法ある秋の月
是法にの月法あるのによまつ汁
深田の月義経なりん草の味
月なきに夢何ゆ来の奥

然の見る月や河らつよ宮ゐ奥
家のすゐ月よ友なき惜徳利
宮中の月に今こそうらやむ
隠岐の月さく葉散る家
象を付て見しへ月よりわきて遁
月ゐ友人よ垣ある影もなし
廣野原雑も路の着きたり
先住む木の影よ見えし路この秋
行き暮るるよ旅の着物し
見渡しても秋津の虫や草莚

不晓や秋父河見のむしの藥
黒沸し穴賑ふ月とらこの月
泣しきや芋きの花月とら
十六夜や肉よ寒あら白き月さめ
分る影よ露も稍り牡丹の家
庭花のつつ柏ろそち八いこ
紅葉の梅やかなつのお要
谿ぬりて土橋の下ぬりちらい
眼よとまる物八かれ葉て月の影
重なる見る程也し後の月

市子参て文重参て后の月
重参て通ふる乃戸や通月
隣面を君見しづや後の月
果もなくなき様子の錦し物
吹切りし帳のなごりや秋の味
猫言はねる鶯やと秋も多
桧の口明ける泥や雉のさま
秋さいて鯉そのまゝ雲の波
保の夕ゑよし海も心さしと
夕涼しんぶらしし秋の海

紀親の恩や子に知らぬ親ごころ
糸紛れ割りなし母の男の子
穂すきや又乞ふ母との足に飯
杉前川よ露の生し秋の空
花々浮稲葉のなりより稲仙花
夜この名葉いまゝの音この稲
出来秋を自慢よもなかりしぞ
蛍火の様りの咲や浮枯枝
秋の面蘇を下り細ゑの礼
咲この女房と咲白も帳の鳴子かな

雨ちまき秋の菅笠已に細
行秋をよ友連れしあるの酒
豆腐屋の煮よ食へ行く秋の暮
唐茄子やころ流に味へ行
以ありの途切れて秋の夕一の形
生米搗角に折し出て秋の萩
萩より見つけて角をお露の芽
あきれ秋や我に五十の上二ツ
冷やかに行きは扇をゐるも秋
行秋や唐よのこされる蝶ひとつ

行蛛や覚えも来るあんころ
こらりみても二ツの夕や秋の蛛
菅笠よ葛こきる弓や実る稲
行く燕の月も今宵の九月に
後さ桜の月の菜枝なり種瓢
種子蒔池も紀に生きけれ
瓢よりこの手しぬ物の持ちこらへに
まだ蔓に緒はて嬉し種瓢
泥足もふみ出て菜畑
花ものよ一輪に後よ菊の露

吸つける煙草のけふりに菜畠
生じたる夏子の若菜菊なと
露霜の今ハ伏見のまくの西
白菊に綿の着綿まつり也
やうしと秋冬ハよし菜他
曲水よろしく千代の菊の露
かほまれよふ鶴をもて菜は露
衣食住足りて一ツ歩に細
恋しきハ昔の秋そ小くら山
鶴鶴重稿の口きゝのかれ上手に

推しみとに時きのすゑぬこの新酒に
わるまさしくわかりたるや蜜柑に
九年母や蜜柑は味代文一ツ
集まりまさんな蜜柑の皆この多
割りて見てみや三ツの味はこのんに
此方の家にわたりて　熟柿

差る物まその味ハひをたとへしに
わかち露は不のきまゝ

冬之部

つよ絲のちからにさゆる鐘の音
円圓の霜とうけしや鐘さゆる
慌よ散のこのこのすま寒こゝのかへ
船のうちはさらされて寒き衣之急
寒をしる佛事に名よ付豆腐ハ
笠木のうつきに弱りぬ隅田川
白の音は寒くひゞる冬の庭
山茶花や寒昏咲のゝ知のものう
鉄まもとくさひとつかすれる木の葉ハ

若川の月影つらむ木の葉かな
船棹々呂中ぞ見えて時雨ハ
先生と以ふ名をのしき初時雨
死んでまた死なずぬるふや初時雨
砂に遊の鯛赤上る木れいの鳥
春ある時用の霜名になる色
水仙よ名を変けはなきて白雪し
帰羊や茶事の席に動きな
姫君と起や生れのまちな子供う
よき天筆書の口切りその影

小庭よ猫乃恋ふや帰り花
そゝもさんの眼につきしや雪也
此中よ見え(?)りふゆ構
炭竈火のひかりよ見ゆる臣従へ
空白しや岩陰ん巷の備
細互切着せしまて緋縅
持んてぞわよらぬ雪の衛へ
陽子の手をも白かし雪ぞく
決して春ハ古きり中させ雪の杢
卅しあれて花ハ紀遊ぞり雪の紅

つもりし雪と落ちてかゝるし雪の下中士
常あるし田ハ白和し〆きの里
夕立や田を三〆り往雪の紅
谷の雪中に積の河とみえし
山にも深さえの白ら雪あるし
雪ふるや鷹の世の白ゆる
元旅や巷立山の雪根深し
降積る如し白和し松の雪
古枯のきらきるあとを無往雪
世の親の恭よ筆のつく枝の雪

雪の松や雪を囲うて橋の口
持ちんとて園中を見るに雪見
観罷て行きまはすし庵の雪
見舞の訊ぬ雪に遣し
明を含て在宅の門の雪達磨
逸き付きて見えり雪の傘
豊年の貢持ちさし給雪
見かけの内ぞて嬉し雪の内
芭蕉忌や御代を在世の尉と姥
今日も枯柱の篝をあてこの気

御分地は桜か見立の枯柱木
枯野しても見渡せば成る村
冬枯や人目も草もかれや見
風や鯛の眼ぬきつつしめ
木枯や子供見付出きこの波紋
寺のしや空さえ凄き玉子酒
風吹かくこるし松の庵
枯尾花月もまぎらぬ禄この秋
表諫門徒は陣の生雛四
行無月雙手の瓢さや世紀

ひらめて寒けしの名あり寒中
まつさきは只汁を暖め香
梅の枝に止りて居たることもなし
笑んだ年の男ぶり之冬は月
冬の月ちらと先生も凄き月
武士の行末見よう冬の月
寒からのさむし冬の月ちひさくなるの
月凍みて野山ハ廣し冬は月
都へん世や□の数に任せて積
いのちはこの世や昨日の夕今は夢

氷鯉は新しくめや霜おきし
物寒や雪まことに行り鳥風
まつ霜や庭の深き行り只沢
年の霜眼よりとし紙茶の上
霜は柾や市に付出る冬息
霜除て樋手向に□行りん
年寄は替伸る程霜除し
身の讃して見逢ハ冬も之もの氷
舟の行水に勤きぬ物まね星
氷もとで見えぬやつおり夏の友

淡雪土其下の古ほりこの花
宮川や牛の涎や 氷まつらん
後の夜や藪子草々嬉しきを
炭火や睦し中 の玉子酒
達磨忌や居る所へよるとさらね
畏こ机練る 冬ゑいの角し
珠数つまむ枝よ鼠何り法紅鉞
伝心を耳よ聞きる唐操この花
報恩や草の大根よ 究このこ
洞よ穴し 独子わゐらるらん冬牡丹

耳ともに音このりや冬の梅
寒さる中のつて先咲きけり室の梅
寒菊や仏汁を生まり遠くて
存せまれて咲きのまゝ浅し室の梅
見に寝しの画とるし ニ番の室
服の付とあくまと知らる録の花
報恩とハ吹しきぬかで玉の汗
和さこの名髪剃申さん冬ごもり
惜仏を一本手向て冬の篠
此自由尚つての忘まん冬この室

冬籠程のまかる女房めと
掃除しさ人ハ坂り女冬籠
こゝ西籠三年遠き若子この外
冬籠個愛過しき霰が狂
我家の膝を縁きのんびり胞袋
古き掃や法も叔の八猫計
條をきや佛性なりと喜の樂
年は暮ハ何と生るハ迷ひなり
如しの暮扶逢さけくの帝さ
揩柿の舊以よ世話し年の暮

さむしくの幽具多し年の名れ
勢ひの直さ出よなかり年は暮
世話しさきて半九三ひとしの暮
年の暮煙孫小木地よ頭の人って
餘緒猫の年ふや暮の門
沙汰さのなき帰はず皆生き逢
一年の墓と積りや亂完
如くんくと餅搗杵の暮浮と
工のみよく丸く出来ずり鏡餅
臼杵の汚想なう年で煮まき餅

燈籠の流行て除秋の奥
法留守居を梅よ訪て鬼は外
百の身の五十で買ふや年の市
市中や二日の賑ふ年始暦

○

正月や雨を二めぐりの四畳半
百のふるほどに青柳のまでし
門口や要のつま菅留守にて恵

たとしぬ下寂りしの花かざる
梅一輪蓬子のうちは白さの花
掛けの河こちらは夢のまた袖
保の名残を寂ら守てこ宅祭
身まま来しむ海苔の味八
春この夜母の仕立たまれ少納
言の句まぬかきしとおなふ
舟遊よ寄り八足りてけ楽一つ
ちらきぬとはふむの御筒
子の命生き親存しなし郎公

毛のぬつむ時ゆるさ　袖ハ
梢にしく志ぬ堂かんや秋の雨
めきて食ほる身のこゝし若そ
うつ法の今よ服覚ぬ鳴子守
秋さむや　ひきさそゆる
一つ二つ拾ハ湿る木の實この夕
落葉しくよう亭る玉霰
何よつ亭こゝのまつ亭淋し　秋の露
このうけのとゆる　枯枝に文
落葉をさきさてのしかゝぬ佛ハ
さハのゆきゆる空は　ふき継

雑之部

紫の雨よ角かや江戸は市
ふこめ路彼きて　つこのま孫之
落葉て色々の泣ぬる日影ハ
寅士もしめて色々の花は蔓ハ
めとこのく　思ハ帰りや藪の中
老の身は荒くも　孫ふ　綱こので

石鏡へ写して祖父の顔見橋
ぬかるみや親の譲は猫あんの
忠臣のかゞみは世のため磨の石
大切に持てや浮雲井戸茶碗
寝ようふく探よふて自由自在なき
何ぞ持の太子果をたしなみ集め
魚よりも揚味し ちゑのふて
息とふみも無かり此まゝ
生埋の数は居合このまゝ住
何椊はせぬに折る御代の松

このたくも清る六着やぬ宝珠
三春は喧嘩清つぶくもよ穏
やつて見る世界八らんかしる学
知りめし浮身録あり酒の友
天満る神在して自在國
出形よ宙の二粒も知りにし
出船や行き夫の笑ひの私
稲むらの結ひか識や江戸仕立
神鳴や心の猫なる浮身
雷のきんゑやりとまる葉の細

○
よこ道なきうちにおもきゝ人生佛
まんのゐのこと只八なまのふ所
と参に似よい何しまにみるなる人て世の
人なきつなり自在なすまゝなり
角も折道鉦も撞木も和らげ
鬼も佛も衣裳にあり

追加

人にまつ弦之何し子乙女かな
上手に参るなれど世の陸
要にまつ是道八嫉しき和も藍
恭しや影の秋風の音

追善俳諧連歌

發起

仲冬て家々忘れ搗牛　三輪翁

卅の程付ぬ見ゆる有明　石生

力おちしかのこの秋の暮哉　静以

纜をおろしても寒し　暁英

有りのあてありに葉の出来し　鉄山

糯栽ゑのえそえて猶をかしく　探子

嫁入の支度もいそく秋の雪　悦之

よその中きれなる塗立て籠　桜生

松茸へ気をつけし湊を帆掛てくる　松壽

見すまても暑の下に照る年　栄光

借まうし神の清水のなかれかな　梅生
きえ扇の帰るかたかぬる　桜井
出代りは踊りて帰る世ゝの遊　心来
嫁さへのなまきれ物いふ名月　子古女
天津房夏行空は彦にて　清羅
猿か時分に清石つつ　志加
納米の花は蔵か枚数里の覚　尼松泉
笛まつまんと伸る平蔵　庵鶯
御陵の茄法せての出る土筆　里用
旅まへ出舞妓も千両の春　敬城

年けよなれもむかしの物わすれ　筍吉
蔵の秋織に続く残しし　友女
京へ行便もわびしき諫安　露生
白秋によりて雲のかへて　某升
東風に梅けなれと痩て志邑て　里暁
押合ふかたよ芝布の立　若堂
月まて西吹る鳥の帰かけり　松宙
四かんとは海へ落る秋水　山松
作割は検見の縁に空川し　梅生
奥筋まかも状の吉左右　其往

開店を祝ましつゝゑみか来て　柳子
生の蓮紅白や見ぬ夢　丸治
名残ハ今を盛の結願の花　華佛
空うつしのよ解る空の根　和交
抱ある苗を小桶よ酒そゝぎ　蓉精
ちらしと蕪よ木の芽紛るる　桃華
係嵜以等

紅梅の香日每よ白し文書し　静山
恋ハ空現なきのまよ郭公　現子
晴る月を去年よ昔や五月雨　鉄山
五月雨の善悦しきく蛍ぞ　撰生
ちるほひや涼み清水の新波そ　松壽
咲たのゝ水よ縁るや百合の新　業光
醸このまさめさめれハ蓬の葉すゞり　以吉
山ふところの切岸あれよさうくる　千古女
松の葉に夕涼しくそゝ廣し　清羅
山百合やゝ同行ののりひ氷　里月

池の影やさらに古松の白牡丹　かん女

ゑふも又行さき無や田草取　露生

てらす影の日ちらちらと五月晴　蕗升

竪横に水の自在やのきのつま　里暁

降程の雨に懸りけり五月幟　若悦

掬ふ水よ泉ある蓮の浮葉　松面

三十三の法に聞しんや風の香る　津多女

五月雨や水の除さんと計りけり　暁英

○

先達の教もまさしの清水かな　石生

229
45

右三十三周忌者慶應四辰年五月廿一日
本所原庭於水野氏現子亭雖為興行去
十五日依上野戦闘此邊炮玉之有患連衆
為不席令兹出句者燒香之面々也

木谷庵藏版　禁賣買